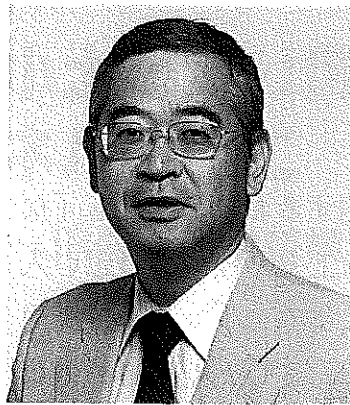


巻頭言

(題字 佐藤信彦会長)



トンネル技術の継承と伝承

早稲田大学理工学術院教授

赤木 寛一

今年、春先よりトンネルに関係したニュースが相次いでマスコミを賑わせました。マスコミ各社は、トンネル専門家によるコメントを求めて、右往左往する事態となりました。これらのニュースを見聞きしながら考えさせられたのは、トンネル技術の継承と伝承の難しさであります。日本におけるトンネル技術は、未だ解決すべき問題は抱えながらも技術的にはほぼ成熟の域に到達したと言っても過言ではありません。その一方で、昨今の社会情勢の急激な変革の煽りを受けて、トンネル現場の減少、世代間コミュニケーションギャップなどのためにその技術を次の世代に伝えていくことがきわめて難しくなったとも言われています。日本トンネル技術協会におかれても、このトンネル技術の継承と伝承に向けた取り組みを既に始めておられます。この巻頭言では、学界に身をおく筆者が土木学会トンネル工学委員会に関係しているトンネル技術の継承と伝承を主な目的とした2つの出版事業についてご紹介して、その任を果たすことにしたいと思います。

土木学会トンネル工学委員会では、2005年10月にトンネル技術の継承と伝承を目的として技術小委員会にトンネル技術史部会を設置し、先達たちの肉声を記録し、日本における近代トンネル技術発展のプロセスを集約することとしました。このために、戦後の日本におけるトンネル技術を担ってきた先達たちへのインタビューを実施し、それをもとにして近代日本トンネル技術史に相当する『目から鱗のトンネル技術史—先達が語る最先端技術への歩み—』を2009年11月に出版しました。

具体的には、このトンネル技術史編纂の最初の仕事として、トンネル技術の継承と伝承の難しさについて、事業者、施工者、コンサルタントなどにおける実情を調査し、各分野の専門家と問題意識を共有しました。この成果を踏まえて、トンネル技術を山岳トンネルとシールドトンネルに大別し、戦後の日本におけるそれぞれの分野でトンネル技術開発を担ってきた山岳トンネル13名、シールドトンネル15名の先達たちに担当者が参上して直接お話を伺いました。その結果をもとにして、主に1945年以降のトンネル現場

の状況、各種のトンネル技術の導入、工夫、開発などの実態について、日本の近代トンネル技術史としてまとめることができました。

インタビューを重ねるにつれて、先達のトンネル技術開発に関するお話はどれも「なるほど、この技術はそういう背景で生まれたのか。」とその創意工夫と技術への思い入れに「目から鱗の」落ちる思いを抱くものばかりでありました。従来のトンネル技術史とは、一味異なるインタビューならではの臨場感と肉声の味を感じていただけるのではないかと自負するとともに、この本がトンネル技術の継承と伝承に少なからず寄与するものと期待しています。是非、ご一読いただければ幸いです。

このトンネル技術史の編纂出版とあわせて、土木学会トンネル工学委員会では現在進められている出版事業のひとつに『トンネル用語辞典』の25年ぶりの改訂出版があります。旧版のトンネル用語辞典は、1987年3月にトンネルライブラリー第3号として出版されたものです。当時、編集委員長を務められた山本稔先生は、この用語辞典編纂の目的として、山岳、シールド、開削の3分野のトンネル技術の横割りを通してそれぞれの用語の統一を目指すとともに、海外との技術交流に資することを挙げておられました。この種の用語辞典の編纂出版を通じて、その時点でのトンネル技術に関する現状認識が記録され、保存されていくので、このたびの『トンネル用語辞典』の改訂出版は現状のトンネル技術の継承と伝承にも大きく貢献するものと期待されます。

新版の『トンネル用語辞典』は、パソコン上での利用を想定してpdfファイルに納められた辞典をDVDに収録して、用語一覧などを記載した小冊子を添えて出版する予定となっています。新版の編纂にあたっては山岳、シールド、開削の3分科会で作業を進めていますが、山本先生が目指されていたトンネル用語の統一につながるよう共通分科会を設けて用語の調整を図っています。収録予定語数は約4,100語と旧版の約2.6倍に増加させ、画像を利用した説明文など電子媒体ならではの強みを生かした辞典とすべく、編集委員会(委員長：朝倉俊弘先生)では2013年11月の出版を目指して鋭意作業が続けられています。

以上、トンネル技術の継承と伝承に関する土木学会トンネル工学委員会での活動状況の一端をご紹介させていただきました。これらのトンネル技術の継承と伝承を通して、きたる2013年が、日本トンネル技術協会、会員の皆様そしてトンネル関連業界にとって、よりよき年となるよう祈念いたします。